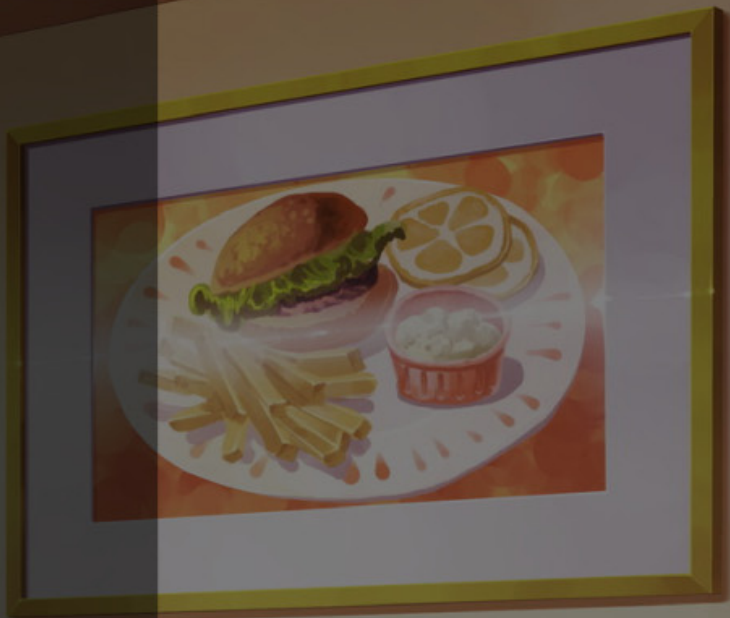



「今まで、お世話になりました……」





うん、お疲れ様。
また気が向いたら遊びにでも来てね。

Hi

D

D

D

.

♪

...

慣れ親しんだ入店音を背中中で聞きながら、これまた慣れ親しんだ帰り道を一人で歩く。

「はぁ……終わった……色々……」

今日おれは、数年勤めていたバイト先を辞めてきた……

職場が嫌いな訳でも、人間関係で揉めたわけでもない。

むしろ、好きだったと言ってもいい。

「はあ……明日からどうしよう……
次のバイト先、まだ決まってるよ」

理由はとて下らなく、情けないもの。
正社員に誘われてしまった、たつたそれだけ。

それだけで、もうここには留まれないと思った。
怖かったのだ、責任を持つことが、新しい環境に
飛び込む勇気が無かったのだ。

「絶対、馬鹿だよな……
でも……だって……」

この場所で切符を切ってしまいうことが、
たまらなく怖かったのだ。

帰り道に見上げるいつもの夜空。

心なしか昨日よりも月が遠ざかった気がする。

世の中には、あれに触れた
人間だっているのにな。

子供の頃はそれを羨むなんて
考えもしなかったよ……

………俺みたいなの奴がクサイこと考え
たって滑稽なだけか……あはは。

雛鳥のように口を開け、惚けながら上を向いて歩いていると、いつもは避けて通る、虫の寄り付く街灯の真下に出てしまう。

「ああ、しまった、前を見てなかった、だけど……」

パタパタ、コツコツと、我武者羅に街灯にぶつかるその姿は、今の俺を咎めているように思えて仕方がなかった。

「虫でもあんな風に必死になれるってのに、俺って……」

「はあ……本当に明日からどうしよう……」

あまりの情けなさに肩を落とした先には、
蛾が一匹だけ、アスファルトの上を這っていた。

「…………お前、飛ぶ気がないのか…………？
それとも飛べなくなっちゃったのか…………？」

「どつちにしる、そこにいちや危ないだろ……」

俺はその蛾を手に乗せ、近くの枝木へ
移してやる。

「ごめんな、俺はこのくらいの高さまでしか、連れて行ってやれないよ」

ただの自己満足、そう分かっていながらも、少しだけ良いことをした気になれた、誇れるような気分になった、それが今の俺には心地よかった。

「優しいのだな」

「ひゃっへえ……!!!」

突然かけられた声に素っ頓狂な声を上げてしまう。

振り返った先には、先ほどまでは確実に居なかった、異様な何か^が街灯の下に照らされていた。

えっ、はっ………？今なんて………？
というか何だコイツ………!!?



深夜の住宅街、突如として目の前に現れた
何かに、驚きも恐怖も忘れて硬直してしまおう。

「星の位置も限界、もう時間もない」

「これも何かの縁かなあ……」



「お主、少しだけ話を聞いてくれるか？」

話し……？ いやいや、それ以前に
目の前のコレは何？ 幽霊？ 不審者？

「……………」

「……………そんなに警戒せんでも……
んっ？ ああ、そうか!! フードを被っておったな」

頭を深く覆っていたフードの下から現れたのは、
金髪の……そして、耳の長い少女だった。



……えっ、あっ、お、女の子……？でも、こんな
深夜の住宅街に……いやっ、それよりも耳がっ!?

「おいっ、聞こえておるか……？
………まだ警戒しておるのか、
まあ、無理もないか……」

「皆似たような反応だったしの……」

な、何だか分かんないけど、悲しそうだししてるし、
取り合えず話をしてみるだけなら……。

「あ、あの……君は……？」

「私はエスメラルダ、エルフの姫だ」



……………えっ、それだけ？全く意味が分から無い。
だけど、うん、ヤバイ娘なのは間違いない。

「……………はあ……………人間よ、私の頼みを一つだけ
聞いてくれぬか？」

「え……………!? あっ、た、頼み……………!?」

「……………男ならもつと堂々とせぬか」

「はあ……………見込み違いだったかなあ……………」

「まあいい……………そう難しいものではない、
むしろ男なら喜ばしい事だ……………たぶんな。
……………お主の趣味が合えばな」

「喜ばしいと言われても、
内容を聞かないことには……………」

「ふー……一度しか言わないぞ……!!」

小さな肩を精一杯に膨らませ、
この女の子は言い放った。



何も言わず、私を抱いてくれっ……!!



エルフのお姫様

に誘われて

異世界転移

したら、

奴隷

にされて、

夜は

休まる日の無い話

俺はシャワーを浴び終え、自室で待つ
エスメラルダの元へと向かう。

「あの……エスメラルダ……さん？
お風呂、空きましたよ」

彼女はあれ以来一言も発することなく、
俺の後に付いて来た。



あの言葉を聞いた瞬間、俺の脳みそは
お仕事を投げ出してしまったらしい。

うん、持ち主によく似た、素晴らしい脳みそだ。

多分、自暴自棄というやつなのだろう。
明らかに怪しいこの女の子の頼みを、二つ返事で
了承してしまった。

どうせ失うものなんて無いんだ、
この後どうなるかが知ったことか。

「時間が無い……私の体はすでに魔法で清めてある、だから遠慮なく好きにしる」

あー、魔法かあ……通りで突然現れたりした分けかあ、うん納得……出来ないよな……。

「じゃ、じゃ……まずローブを脱いで貰えますか……？」



俺の要望に、今まで感情を露にしなかった彼女の顔がみるみる赤く染まり、分りやすく羞恥心を露にする。

「あの……?」

「わ、分かっておる……!!!」



彼女がためらいながら脱いだローブの下から現れた衣装は、露出の多い、私生活では着用するはずもない、男の欲情を煽る淫靡なものだった。

スハリ……

「えっ……と……」

これが噂に聞く痴女？

「……………ツ私の世界とこの世界の風紀に大した違いが無いのなら、この格好がおぞましく破廉恥なことくらい理解しておる」

「だから、じろじろ見てないでさっさと抱けっ!!」

俺は彼女の剣幕に押され、急かされるまま、その小さな肩を抱き寄せる。

ふ、震えてるのか……彼女も緊張してるのか？ いや、そ、それとも俺の手が震えてるのかも、ああ、どうしよう、何だこの状況、何やってんだ俺——!?

今の今まで麻痺していた緊張感が、土壇場になって湧き上がり、この姿勢のまま指一本動かなくなってしまった。

「……おい、ど、どうしたっ……時間が無いのだ……だから……はやく……な……」



「俺……経験が無くなって……
その……ごめんなさい……」

「……………」

彼女の呆気にとられた顔に、今にも
逃げ出しそうになってしまう。

しーしー

ああ、もう消えてしまいたい……。



「ぷっ……ははっは、お主、初めてだというのに、こんな得体の知れない女を招き入れたのか、あははは」
張りつめた風船から、空気が吹き出すような
笑い声が室内に響く。

「いやだって……
可愛かったから……」

「そうか、そうか、私が可愛かったか、あははは
それは良かったなあ、ぷっ、はははは」

嘲笑われると覚悟していた。
だけど、彼女の見せた表情はとても純粹で、
愉快そうな笑顔そのものだった。



「はははっ………だが、うむ、思ったより
肝の座った男で安心したぞ」

「あ、ありがとうございます？」

「よし、うむ、そうだな、私が
リードしてやろう!!」

「ええ……!？」



「うん、うん、その方が私の性に合ってるな」

「だからお主、その床へさっさと横になれ」

うむうむ!!

「えっ、あっ、ちよ……!!?」

そう言うと、その小さな体からは想像もできない力でベッドに押し倒されてしまった。



「おお、これが男の……これはもう、準備が出来ておるってことだな」

少し乱暴に脱がされた下着の下から、窮屈そうにしていた陰茎が跳ね起きる。

「は、はい……」

自分の太ももに触れる柔らかな感触、そして、なまめかしい体温に、陰茎に痛みを覚えるほど血がたぎるのを実感する。

ブルン



「ま、まっっておれ、私もすぐに準備をするから……」

ん……

そう言っって少女は自分の秘部に手を添え、その割れ目をゆっくりとなぞり始めた。



「……………んっ、……………ふぁ……………」

白い指先が柔肌を押し広げ、
薄桃色の突起を優しく転がす。

んっ

あっ

……………ゴクリ……………

目の前で行われる現実とは思えない
光景に生唾を飲み、魅入られる。



「う……んっ……」

「あのっ……舐めてもいいですか……?」

「……は?」

普段の自分なら絶対に言えないで
あろう欲求が自然と口に出た事に、
自分でも驚いてしまう。



「い、いや、そのすみません……」

ああ、しまった、今度こそ嫌われたかな。

「お、驚いたが、それは普通のことなのかなのか……?」



「た、多分、変ではないと思います……」

「そ、そうか……ならば、ほら舐めるがよい」

嫌々やっているのなら、こんな事は
受け入れてもらえないだろう。

少なくとも嫌われてはいない、その
気持ちを確認できたことに少し安堵する。



俺は目の前に晒された、白桃のような恥丘に
優しく舌を這わせた。

「っあ……!!はっ、んっ……!!」

んっ!!
っ!!
っ!!

舌先が敏感な部分に触れる度、ぴくぴくと
反応が返ってくる事がうれしかった。

「ふあっ……んっ、んんっ……!!」



「んっ……こ、これは、少しこそばゆいのっ……んんっ……!!」

夢中で舌を這わせていると、段々と口に唾液のものではない感覚が広がり始める。

あっ……これって愛液……？

「っ……ああっ、んっ、ま、まで、もういいぞ、一度とまっ……て……!!」



「っは……」

俺は言われるがまま、舌を離す。

「っ……はあ……、こそばゆかった
が、なかなか良かったぞ」

「俺も興奮しました……」



「ふふふっ、そうか、ほれっ、見てみる、
お前のお陰でこのありさまだ」

押し広げられ、露出した膣内は濡れ
きっており、蛍光灯の光をテラテラと
返していた。

「そこまでジツと見られると
思ったより照れるの……」



「す、すみません……」

「ふふっ、よいよい、私の言った事だしの」

「それよりも、今から私のここに、お主の……
その……なんだ……モノを入れるが、よいか？」



「は、はい、お願いします……!!」

「う、うむ、よいか……? いいと言うまで
絶対に動くでないぞ」

そう言うと彼女は少し腰を浮かせ、
俺の亀頭の先を薄桃色の穴の入り口へ
あてがう。



「っ……これは、思ったよりも……」

しっかりと閉じた割れ目は、俺のモノを
すんなりと受け入れることは無く、亀頭を
愛撫するように、表面を滑り抜ける。

あっ……

「ぬっ……むっ……あっ……
これなら……」

フゥ

フゥ



幾度かの試行のあと、安定した角度を
探り当てたのか、ゆっくりと腰を落として
きた。

「つあ……くつ……うあつ……」

膣内の滑らかな感触とは別に、強い膣圧が
陰茎を締め付ける。

「んっ……もう、少し……かっ……」

彼女は声をくぐもらせながら、浮いた腰を
下ろしきった。



「ふうー……ど、どうだ、入ったぞ」

大きな息を吐いた後、接合部を
ひけらかしてきた。

「は、はい……って、血が……」

その接合部からは、純潔であろう証が
見て取れた。



「んっ……何をっ……驚く……？」

「だって……こんな、誘われ
方だったからってっきり……」

「ふふっ……お互い、青い者同士、
気負わずに済むだろ？」

「……っ、痛みも慣れてきた、動くぞ」

「えっ、無理しなくても……」



「心配するな、この程度の痛み、狩りでは日常茶飯事だ」

「狩りつて……」

「たらたらしている暇は無いのだ、余計な気遣いなど無用だぞ」

忘れていた、これは別に恋人同士のスキンシップ
ってわけでもないんだ、だから余計な気遣いなんて
要らないのか……。



少しの落胆の後、何も考えずに快楽に身を落として
もよい背徳感に背筋をゾクゾクとしたものが走る。

「ふふっ、じゃあ、今度こそ動かすぞ」

フフッ



「ふふふっ、どうだ？ 気持ちが良いか？」

「は、はい、気持ちいいです……!!」

「そうかつ……よし、私もだいぶ
馴染んできたからな、もつと早く
動くぞ……よいな？」

「わ、わかりました……!!」



「はっ……んっ……ふっ、あっ……!!」

「んっ、んっ、あっ、くっ……っあ!!」

あっ

ハッ
ハッ

んっ

ハッ
ハッ

先ほどの夢の中にいるような心地よい感覚とは
うって変わり、彼女の体重を腰で受け止め、肌同士が
ぶつかり弾ける音、そして、局部に感じる大きな快感
が、この状況を現実だと強く認識させる。

「んっ……っ、か、顔が歪んでおるぞ、
どうした？ 苦しいか？」

「いやっ、これ、気持ちよくて……っ!!」

彼女の中はシルクのような滑らかさである
上に、波打つようなひだが、しつかりとした
快感を与えてくる。



「はぁ……はぁ……んっ、あぁっ!!」

彼女の声も吐息から、熱を帯びた
声に変化していく。

「んっ、あっ、あっ、はっ……んっ!!」

「ふふっ……んっ、お主のモノが熱くて
硬くてっ、恐ろしいのになっ……それが、
心地よい……不思議となっ……」



「っあ……っくっくっ、お、俺っ……もう……!!」

「んっ……どうしたっ、もしや……っ、こ、子種が
出そうなのか……っ?」

「は、はいっ……もう、我慢
出来ません……っ!!」

「んっ……が、我慢などするなっ、私の中に
思いつ切り吐き出せっ……!!」



「な、中にですか……!?!」

「そ、そうだった……私を孕ませるつもりで、
思いつ切り中に吐き出せつ……!!」

グイッ

グイッ

「っあ……くっ、で、でもっ……子供がっ……!!」

「男ならうだろうと言っ、ほらっ……どうだ?
気持ちいいか? 受け止めてやるからっ、遠慮せず
全部吐き出してみろっ……!!」



「あー……く……!!!」

「はっ、はっ、……っあ、か、硬さが
増してきておるぞっ……!!!」

「出るのだなっ……っ、私の中に
子種を出すのだなっ……!!!」

「!!!」



「あっ、んっ、んんっ——!! な、中につ、お主のっ、
あっ、熱いっ、出ておる……っ!!」

射精と同時に腰が痙攣するほどの快楽
が襲い来る。



「んっ……っ、はあ、はあ、……っ、ま、まだ中で震えておるぞ、よほど気持ちよかったのか……？」

「は、はい、凄く……良かったです」

「そうか……それは……うん……よかった……だが……やはり、一度では……ダメ……か……」

そう、つぶやきながら、彼女は自分の下腹部を撫で、ぶつぶつと黙りこんでしまう。



気まずい沈黙……一度だけとはどういう意味
だろうか、ダメとも聞こえた気がする……そもそも、
カラダだけの関係、行為が終われば何を話せばいい
かすらも分からない。

だけど次の行動を必死で考えている頭とは別に、
自分の体はなんとも正直だった。

「なっ……!!? お主……これは……」

自分の陰茎は再度、硬さを取り戻し始めたのだ。



一晩だけの関係、だから俺は取り繕う必要もなく
欲望を正直に話す。

「ま、まだ時間ってありますか？」

「えっ、ああ……」

「もう一度……いいですか？」



「はあ……?」

「今度は俺から動きたいです」

「……お主がか……?」

俺に似つかわしくない積極さに、
侮蔑とはまた違う、半信半疑といった
視線が刺さる。

「そうです……?」



「なんだその曖昧な態度は、自分の意思くらい、ハッキリせぬか……だが……」

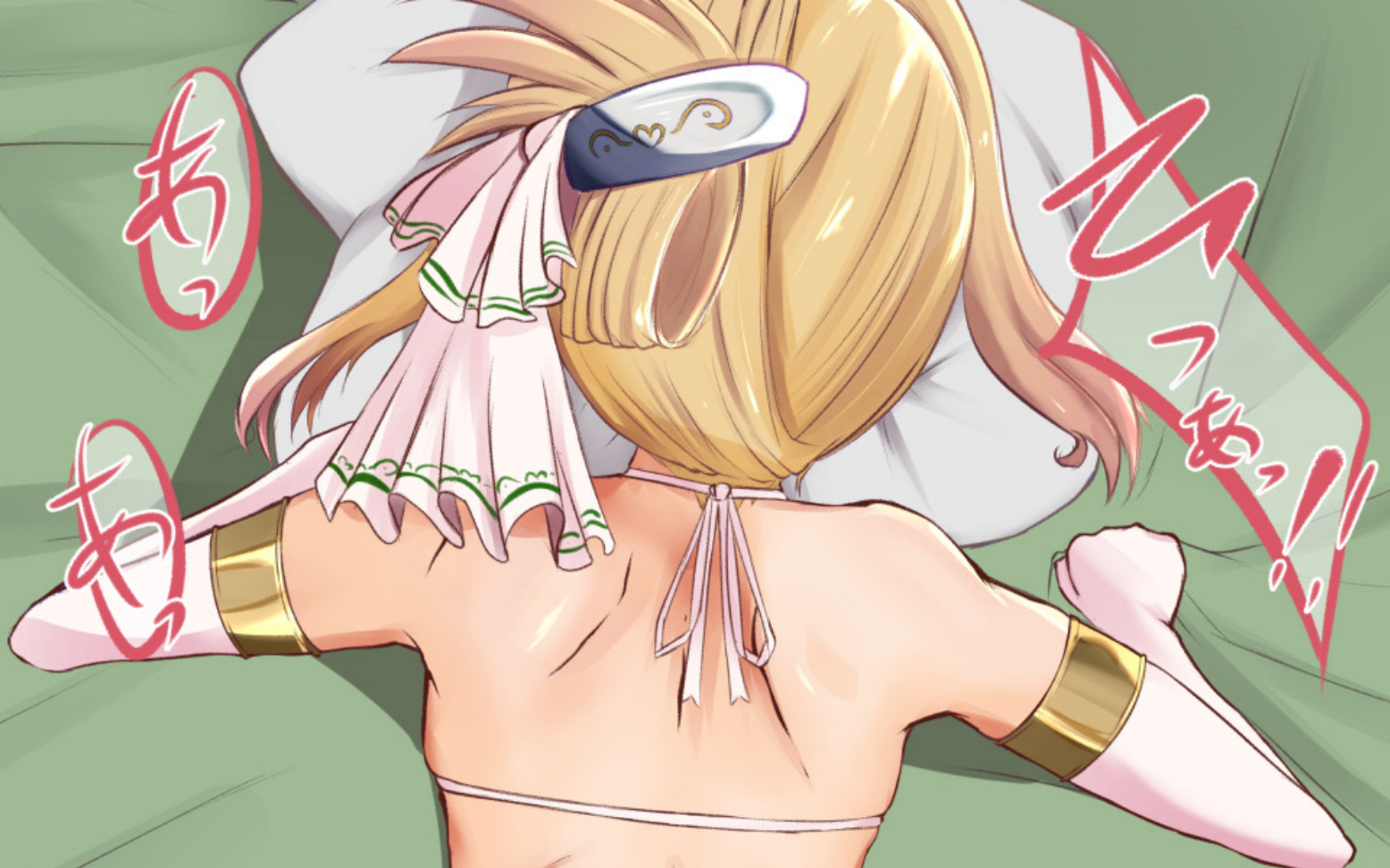
フフ……

「……ふつつ、女々しい奴だと思っておったが、
存外に逞しい男だの」

「よいぞ、もう少し私を楽しませてみるがよい」

挑発交じりの無邪気な笑みで、エスメラルダは俺に
身体をゆだねてきた。

「つあ……さつき、気遣う必要はないって
言ってたから



「ひやつ……んっ、んっ……お、お主、
何だか先ほどと人が変わっておらぬか!？」



「……そ、そうかな……？」

正直、自分でもこんなキャラではないと思う。
だけど、おちよくられたまま、こんな情けないまま終わる
なんて出来ないと思っってしまった。



どうせ一晩だけの関係なんだ、なら、後先考えず
違う自分に挑戦したって……!!

「っ……あ……っ!!これ、気持ちよすぎて
止まんないかもっ……!!」

「はっ、ああっ!!お主のがっ、お主のっ、
硬く熱いのがっ、腹の中で暴れて……っ!!」

あぁっ!!

パン

はっ

あっ

小気味良い軽打音に合わせて、張りのある
尻肉が弾む。

「はあっ……んっ、ほ、本当に何だこのっ、
感じは……ああっ!!」

「あっ、あっ、ああっ……!! 腹の中がっ、
ズンズンしてえ……!!」

「はあ……はっ……もしかして、感じてる?」

あぁあぁ!!

パン

はっ

あっ

パン

パン

「ひうつ……か、感じて? わ、わからんが、
さっきの心地よさとは違う、た、耐えがたい
ものが腹の中を痺れさせてえ……はあん!!」

「はあっ、はあっ、わ、私はっ……ただっ、
子種が欲しかっただけなのにつ、こんなんっ、
こんなものっ……知ってしまったらあ」

あぁっ!!

パン

はっ

あっ

パン

パン

彼女の言葉に合わせて、膣内が引き締まり、
俺のモノを強くしごき上げる。

「あぁっ……くっ、やばっ……!!」

強烈な射精感を感じつつも、必死に耐え、
抽送の速度をさらに増していく。

「はあん……!! はっ、はっ、ああっ!!
だめっ、だめっ、頭までっ、気持ちよくてえ!!」

「はっ、はあ……俺もっ、頭真っ白に
なって……っもう、これ以上はっ……」



搾り取られるような膣の収縮。それを、とめどなく溢れる愛液が潤滑剤となり、大きな快楽をもたらす。

限界まで湧き上がる射精感を抑えるのも限界だった。

「くあっ……も、もう限界……っ、中につ、もう一度出すからっ……」

「はあっ、はあっ、はああんっ……っ!!
っあ……っ、うんっ、出してくれっ、お主の子種を
私の中につ出してくれっ……え!!」



「はっ、うっ……っ、まだ腹の中で、お主のモノ
が脈打っておる……」

「うっ、ごっごめん……っ、こんなに出るなんて
俺も思って無くて……っ」

はあ？

うアッ

「ふふっ、何を謝る……先ほどの威勢は
どこへ行った……？愛らしいの、お主は」

ド
ッ

ド
ッ



二人とも息が落ち着いたのを見ると、
エスメラルダが、物静かに語り始めた。

「私の目的はな、この世界で『種猿』という奴隷を
見つけることなんだ」

「種猿……?」

「うむ……そうだな、子を成す為の性奴隷とでも
言った方が分かりやすいか……」

「エルフは血が強くての、同族とはまずいのだ、
だから人と子を成し血を薄めなければならん」

「しかしだな、王族は余計なしがらみを作らぬため、
同界からではなく、異界から種猿を用意するのが
習わしとなっておるのだ」

「前例では力ずくや魔法で幻惑などして連れ帰るのだが、そんな手段は好かないし、私はそもそも子作りなど興味がない」

「姫の責務として仕方なく来たはいいが、誰からも気味悪がられ駄目だった」

「どうしたものかと途方に暮れていたところに、お主が通りかかった……」

「俺が……」

「ふふっ、誰にも見向きもされなかった虫に手を差し伸べておつたる？そんなお主に興味がわいての、何となく魔法を解いて話しかけたのだ」

とても本当とは思えない内容に困惑してしまふ。だって、彼女を異世界の佳人だと示す証拠は、あのとんがった耳一つだけなのだから。

それに、信じたところで今夜だけの関係、真実かどうかなんて俺には関係無いんだ……。

「我ながら余計な事を喋ってしまったな……」

「ふう……、星の位置がずれて、もうすぐこの世界には留まれなくなる。そろそろお主とはお別れだ」

「待って、その……目的は種猿ってやつだよ。果たせなかつたらどうなるのかな？」

「ははっ、気にするな、一応、種だけはお主からたっぷり貰ったからの、上手くいけば子が出るじやる」

「気にするなって……もしダメだったら、その……立場が悪くなったりするとか……？」

「よいか、同情などいらんぞ」

エスメラルダは俺を突き放すように、ぴしやりと言いつつ放った。

「うむ、そういうことじゃ、もう時間も無い、そろそろ元の世界に帰るとするか」

「色々と迷惑をかけたな、じゃあの……あー……
そう言えば……お主の名すら聞いてなかつたな」

「悠一です……悠一って言います」



「ユーイチか……ふふっ、親の名になるかも
しれんのだからな、覚えておくよ」

A close-up illustration of a young woman with long, flowing blonde hair and large, expressive purple eyes. She has a soft, slightly blushing expression. She is wearing a green top. The background is a warm, reddish-orange glow.

「改めてだな、じゃあね……ユーイチ」

「……さようなら、エスメラルダ」



「……………エミイ……………親しい人はそう呼んでる」

「……………うん、さようなら……………エミイ……………」



お互い、別れの言葉を告げたにも関わらず、
視線を離す事が出来ない。

月の光が詰まった宝石のような瞳。
この世の物とは思えないその瞳は、エミイ
が異世界の住人と信じるに十分な輝きを
放っていた。

俺はその光に吸い寄せられるように、
顔を寄せていく。



お互いの息遣いを感じる距離。

触れる寸前、柔らかい人差し指が
俺の唇を押しとどめる。

「種猿はあくまで道具だから、そういうことを
するものではない……」

明確な拒絶の言葉。
この関係はここで終わり、夢から覚める時間だった。

「そっか……」

「……のだが……ふふっ、ユーイチは
違ったのだったな……」

唇に柔らかな感覚が一瞬、
だけど、確かに伝わる。

ちゅっ

「本当にさようならだ、ユーイチ」

「エミイ俺は……」

挑戦しない人生だった。
だけれども……

「俺も……ついて行くよ」

後先なんて分からない。

だけど、別れたくはない。
頭の中はそれしかなかった、
必死にそれだけを考えていた。

「何を馬鹿な事を言っ……。
種猿の待遇は決して良くない、
それにもう戻れないのじゃぞ？」

「俺はっ……!!
……この世界だと、あの蛾みたい
なものだから……」

「ユーイチ……お主……」

「それにつ……!!
エミイと一緒に居たい、会って
短いけどそう思った……」

「自分からそんなのになりたいなんて、
気持ちの悪い奴と思うかもしれないけど、
俺っ……このまま終わりだなんて嫌だよ」

自分の気持ちを吐き出し、未知の世界へ
飛び込む。数時間前の自分には想像もでき
ない変化だろう。

精一杯やったよな、これでダメなら……
うん、諦めよう……悔いはないよ……

それまで、俺の目を真っ直ぐ見つめていた
エミイの瞳が、ふっと、伏目がちになり……。

「ユーイチ……ありがとう……。

その……なんだ……素直に嬉しいぞ」

「エミイ……!? それって……!!」

「ああ……そのっ、私も……肌を重ね、
子を産むのならお主がいい……そんな、
言葉には出来ない身勝手な願いを思い
浮かべてはおった……、だから、うん、
私と……一緒に来てくれるか？」

「もちろん……!!」

「ふふっ、まさか最後は私が引つ張られる形になるとはの……」

「少しは見直してくれたかな？」

「げふん、そ、そうだなユーイチにも多少の男らしさはあるのだな」

「だがな、改めて言うが、向こうでの種猿の扱われ方は決して気分の良いものではないぞ」

「覚悟はしてるよ……」

「まあ、これでも私は向こうで多少は偉いのだ、ユーイチの扱いが悪くならぬよう努力はする……だから……」



安心してくれ、ユーイチ。
私を選んでくれた事は絶対に後悔させない。
お主が望むなら、その傍らにずっと寄り添ってやる。
そう、私の名に誓うよ。

力強く、だけど、とても優しい
微笑みだった。

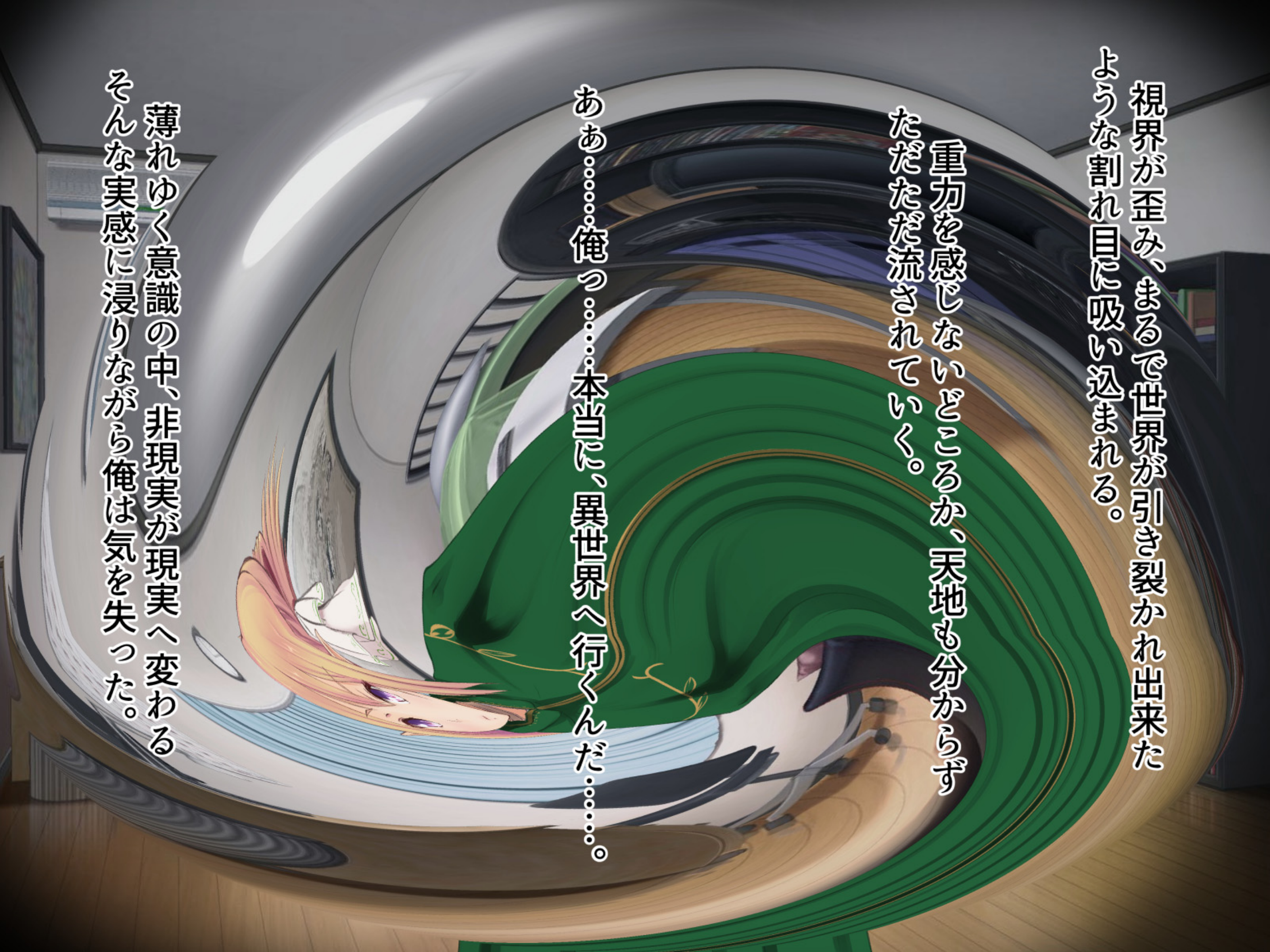
「では、出発するぞ。少し気分が悪くなるかも
知れんが、我慢してくれ」

「うん、分かったよ」

エミイが俺には聞き取れない言語で何か呪文の
ようなものを唱え始める。

「うわっ……なんだ……」



A character wearing a green cloak is falling into a large, swirling vortex of light and energy. The vortex is composed of concentric rings of light, with colors ranging from blue and green to yellow and orange. The character's face is visible, showing a look of surprise and disorientation. The background is a dark, circular opening, possibly a portal or a well.

視界が歪み、まるで世界が引き裂かれ出来た
ような割れ目に吸い込まれる。

重力を感じないどころか、天地も分からず
ただただ流されていく。

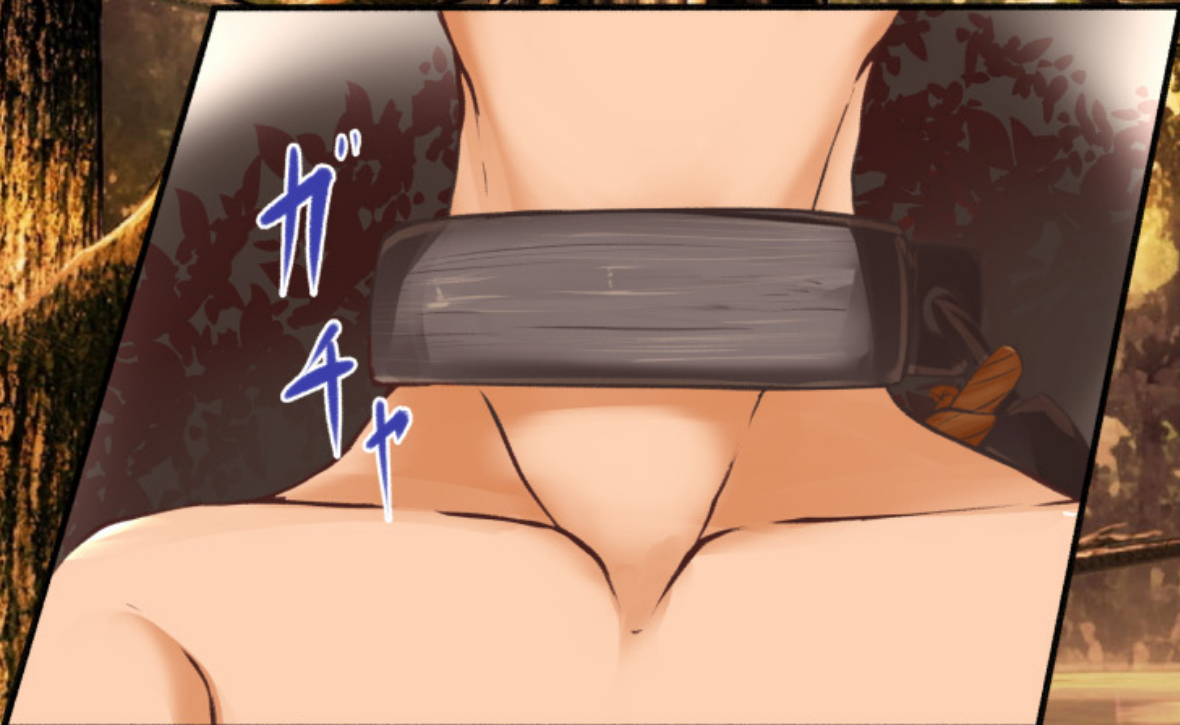
ああ……俺っ……本当に、異世界へ行くんだ……。

薄れゆく意識の中、非現実が現実へ変わる
そんな実感に浸りながら俺は気を失った。

少しの冷静さを取り戻した矢先、自分の装いに驚愕する。

俺っ……何も着てない……!!?

衣服は剥ぎ取られ、そして何より……



ガ
キ
ャ

首には重い、鉄製の首輪が架せられていた。



「エルフのお姫様に誘われて
異世界転移したら、奴隷にされて、
夜は休まる日の無い話」

2019年中発売予定